

# 学長の業績評価について

(評価期間：令和4年4月1日～令和5年3月31日)

令和5年8月

学長選考・監察会議

令和5年度 国立大学法人茨城大学 学長業績評価 総合評価書

<b>総評</b>	総合評価
	4.0

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各評価を集計し、その平均が総合評価となる

評価コメント
<p>○偏りなく全ての評価項目においてバランスよく前向きに取り組まれている。強いリーダーシップを発揮しこのまま取組を推進していかれると良いと思う。</p> <p>○地方大学として、地域に根ざした特色ある教育・研究成果、地域企業との連携の取組など、リーダーシップを評価する。</p> <p>○大学内外の厳しい環境の中、多くの評価項目で期待を上回る成果を挙げた。</p> <p>○期待する程度を上回っていると考えられる。今後、イバダイ・ビジョン2030に基づいた大学運営で努力されることを期待する。</p> <p>○時代の大転換期を牽引する創造力豊かな人材育成に期待します。今後の地方大学の全国モデルを作っていただきたい。</p> <p>○教育・研究・地域連携・国際交流はいずれも期待する程度を上回っているが、大学運営の問題点の早期改善を期待する。</p> <p>○様々な面で改革の姿勢を積極的に打ち出されている点は評価できる。今後は、教職員の負担感を増さないよう、全学一致の体制づくりに努めていただきたい。附属小学校でのいじめ事案の対応に不備のあった点について、今後の教訓として改善に全力をあげていただきたい。</p> <p>○少ないリソースの中、様々な方面へ手を尽くして大学運営に努力されている。附属学校園の問題は、突然降って湧いた話ではなく、長きにわたり潜在リスクであったはずであり、ピンチをチャンスに変え、よりよい大学運営を目指していただきたい。</p> <p>○教育、研究、国際交流、社会連携の各方面で努力され効果をあげているが、それらを総括する大学運営については、いまだ方針が定まっていないように思う。</p> <p>○地方国立大学の中で、様々な分野で成果をあげられており、総合的には期待する程度を上回っていると思われる。ただし、まだまだ“茨城大学”のブランディングは道半ばであり、特徴や魅力が見えないので、学長を中心とした“茨城大学”の「ブランド力向上戦略」に期待する。</p> <p>○継続的な大学改革や組織改革が社会から求められている一方で、持続的な取組にするためには資源をどう確保するのが重要である。業務効率化のための組織改組は、現場の声を聴きながら丁寧に進めていただきたい。</p> <p>○第4期中期計画の令和4年度自己点検評価書を見ると、進捗状況に問題はないが、IVの評価が1項目しかないのは物足りない。IVをもう少し増やせるよう努力していただきたい。</p>

教育	4.7
----	-----

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント
<p>○「教育の質保証を先導する」方針の下で、改革に積極的にチャレンジする姿勢は高く評価される。“地域未来共創学環”の開設認可は大きな前進であり、今後に期待する。</p> <p>○「教育の質保証」に対する取組をまとめた書籍の刊行や、教学マネジメントを基軸とした高大連携への取組について、将来的に大いに期待できると思われる。</p> <p>○特色ある教育組織「地域未来共創学環」の開設に取り組んだほか、プラスIプログラムを構築するなど、今後の学びの充実が図られている。また、高い評価を受けた本学の「教育の質保証」の取り組みを書籍化して公開しており、学生の満足度とDP自己達成度も高い。</p> <p>○教育の質保証について学内の取組を総括し、刊行物として学外にその成果を示すことが出来た。新しい教育組織「地域未来共創学環」の設置準備については、令和6年度開設に向けて相当程度、進捗がみられた。学外からの期待も高いため今後は積極的なPRが期待される。</p> <p>○教育の質保証を書籍にまとめたことにより、大学関係者ばかりでなく大学生にも学びの目的が確かなものになった。また、高大連携が共創へと踏み込み、次への具体的施策が期待される。</p> <p>○実践的英語をはじめ、課題であった学生の自己達成度が上昇した。未来共創学環の新教育課程の創設に期待する。</p> <p>○社会の動きに合わせ、データサイエンスやアントレプレナー等の教育の機会の充実を図っていることや（プラスIプログラム）、新たに学部等関係課程を導入するなど、よりよい教育を絶えず望む強い姿勢がうかがわれる。</p> <p>○ビジネスとデータサイエンスを両輪とする文理横断的学びへの取組は評価できる。学環方式がどれだけ機能するかは、今後の推移をみる必要はあるが、一部学生に限らず、これらの学びの機会を広範囲の学生に与えるプラスIプログラムの取組は極めて重要と考える。ただ、英語能力の伸長は全学生に要求されるものであり、入学前教育を含め、プラスI方式以外にも検討の余地はあるかもしれない。</p> <p>○社会人のキャリアアップ支援等を目的としたリカレント教育プログラムの強化促進を実施している。今後は、地域社会・地域企業のグローバル化やデジタルトランスメーションへも対応できる教育プログラムの構築を期待する。</p> <p>○教員の研究時間確保のため、令和6年度からの授業の105分化と基盤教育の再編、学部専門科目の精選を進めた。</p> <p>○教育の質向上を目指して、しっかりとPDCAサイクルを回せる体制を実現したこと、さらには評価業務の効率化を目的に先進的なDXを実現しつつあることは高く評価できる。一方で、第4期中に教員を大幅に削減すること、そして削減に伴い増加する各教員の負担を、組織の変革ではなく、部局の努力（例えば開講の精選）のみで乗り越えようとしていることに不安がある。</p> <p>○初等・中等教育からの「連続性のある学び」を積極的に展開してほしい。</p>

研究	4.1
----	-----

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

評価コメント
<p>○CRERCに向けた整備が実施され、地球温暖化対応などに対する研究等が期待される。</p> <p>○研究業績数が目標値にほぼ近づいた。特に理工学研究科田中教授を中心としたカーボンリサイクルエネルギーリサイクルの取組は注目したい。</p> <p>○カーボンリサイクルエネルギー研究センター設置準備、学外研究機関との連携を進めるなど、第4期における研究の基盤を整備した。</p> <p>○科研費や論文業績数において数値的な成果には表れていないものの、CRERCをはじめ多方面において今後成果に結びつく期待される研究の芽を育てることに努力されていると思う。</p> <p>○茨城大学ならではの特色ある研究テーマの設定、その成果（地域還元）に期待したい。</p> <p>○「研究活動強化促進方策」では、新たに図書出版助成が導入され、研究成果の増加につながっている。地道な研究支援が科研費採択率アップにつながると思われるため、引き続き文理のバランスのとれた研究支援を期待する。</p> <p>○産業界や地域社会との連携を強化し、SDGsやカーボンニュートラルを目指す研究を推進している。今後はCRERCを拠点に、「環境課題の解決に取り組む特徴ある大学」を目指していただきたい。</p> <p>○受託・共同研究契約金額が、目標値を上回ると同時に伸びを示している点は評価できる。他方、科研費は相変わらず採択件数、金額ともに目標を下回り、伸びも鈍い点が課題である。一定の対策は打たれているようで、今後、その成果を見守りたい。</p> <p>○本学の研究の強みである気候変動分野で「カーボンリサイクルエネルギー研究センター」を設置、カーボンニュートラルに向けて早期の実用化を期待したい。課題である科研採択数を伸ばしていただきたい。</p> <p>○CRERC設置に向けた整備など、大きな取組は評価できるが、教員個人の校務に対する負担が減っていないことから、科研費採択数や研究業績の伸び悩みがある。</p> <p>○研究力の強化を打ち出したこと、また研究の新しい柱としてエネルギーを取り上げ、GLECに加えてCRERCを立ち上げたこと高く評価したい。一方で、教員数の削減や校務の増加は確実に研究者の時間を奪っており、大学全体の研究力についてはむしろ弱体化している感がある。研究マネジメントについて、明確な方針が打ち出せていない点も不安材料である。</p> <p>○優れた研究業績については、本学のホームページへの掲載だけでなく、もっと積極的にアピールしていただきたい。</p>

# 地域連携

# 4.3

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

## 評価コメント

- 地域企業との共同研究が関東地方（東京都を除く）でトップを維持している点は大いに評価できる。
- 共同・受託研究で高いレベルを維持した。
- リカレント教育の強化、地域との共同研究の推進、学環の設置、学生による学外地域活動の推進など、地域との連携強化に向けて幅広く取り組まれていると思う。
- 地域未来共創学環の開設認可が得られた。また、大学生によるまちづくりプレゼン発表会を行うなど、地域の知の拠点としての実績が大きかった。
- 地域未来共創学環の開設認可を得ることで、地域に対する目に見える貢献が期待される。
- 県内の自治体との連携が広がっており、さらに教育や研究面で深化していくことが期待される。
- 地方大学のこれからの時代のキーワードは「地域連携」。特に防災に関する地域連携の取組は大いに評価できる。
- 地域での共同研究件数が多い。学生によるまちづくりプレゼン発表会や防災・減災の講演会など地域と連携した活動は活発である。引き続き、地域の知の拠点としての役割を期待する。
- 「茨城大学リカレント教育プログラム」を始動し、教育プログラムを拡大させている。また、地域での共同研究の展開として、地域企業との共同研究は、関東地方（東京都を除く。）で2年連続トップの実績である。今後は更に地域社会、地域企業等との連携を図り、茨城大学の存在感を対外的にも見せつけていただきたい。
- 群馬大学・宇都宮大学との連携の成果に期待する。
- 地域での共同研究件数の増加や地域志向の学環の立ち上げ等、地域連携は着実な成果を上げており、地域に貢献する大学として存在感を増している。地域の企業も本学の卒業生に大きな期待を寄せており、企業との連携を深める大きなチャンスが到来しているように思う。一方で、茨城県についてはいまだ良い関係を築けていないように感じる。
- 新型コロナ禍の影響のため、地域連携事業に制限がある中、水戸市との「まちづくりプレゼン発表会」等の協働事業などの新たな展開がみられた。ポスト・コロナ期においては、これまでの地域連携の検証を行い、メリハリのある地域連携を行うことも必要だと思われる。

# 国際交流

4.0

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

## 評価コメント

- コロナ禍が存在する中、インドネシア各大学との大学間交流を再開した。また、日越大学の大学生受入れが再開し、気候変動への対応のための研究が進むことが期待される。
- コロナ禍を乗り越えて、3年ぶりに日越大学の学生インターンシップの受入れを再開するなど、堅実に努力を重ねている。
- コロナ禍を経て、インドネシア訪問とその後のインドネシア・イスラム大学（U I I）等との継続的な学術交流などで進展が見られた。オンライン環境の活用も含め、教育研究の更なるグローバル化が期待される
- 積極的にインドネシアの大学に対して国際交流の拡大機会をアピールしており、具体的な成果が期待できる。
- コロナ禍の収束に合わせて、アジア圏の大学を対象を絞り国際交流活動をリポートさせたことは高く評価できる。学長の国際交流にかける熱意は教職員にも浸透しつつあり、そのリーダーシップの下、今後大きな展開が始まるように感じる。
- ポストコロナに向けた海外の大学との連携が進められており、研究面での強化に期待したい。
- 東南アジアを中心とする留学や共同研究、留学生を交えての地域活動など、コロナ収束の兆しから交流活性化に向けて積極的に取り組まれている。今後更に強化していかれるとよいと思う。
- コロナ禍の影響が残る中、東南アジアの大学を中心に堅調に交流を進めた。
- オンライン留学生交流室を活用したグローバル化が評価できる。
- 国際連携教育を推進し、国際共修科目及びCOIL科目の積極的導入に努め、コロナ禍においても数多くの留学生交流を実施し、グローバル展開を実施している。今後はダイバーシティの考えも取組のベースに置いて、国際的な地域社会創りに貢献していただきたい。
- リアルな国際交流を再開したが、これからもハイブリッドで国際交流教育を進めていただきたい。
- 留学生を大幅に増やし、平素から国際感覚を養える環境をつくり、学生の英語力向上を図る必要がある。

# 大学運営

## 3.1

評価	評価内容
5	期待する程度を大幅に上回った
4	期待する程度を上回った
3	期待する程度であった
2	期待する程度を下回った
1	期待する程度を大幅に下回った

※ 各委員の評価を集計し、その平均が評価となる

### 評価コメント

- 「茨城大学グリーン化推進計画」(茨大GXプラン)がSDGs達成で高位に位置付けられるなど評価できる。
- DX戦略を担う新組織「情報戦略機構」を設置し、新しい取組を進めている。大学運営については強固な経営基盤と組織編制を通じて、持続可能な運営を目指しているが、将来に向けては茨城大学ならではの「特徴やアピール度」が必要であり、ぜひ“茨城大学”としてのブランド力向上を念頭に置いた大学運営を期待する。
- 情報戦略機構の設置、地域未来共創学環の設置などの組織改革を進めた。
- 情報戦略機構の設置を評価する。教員組織改革にリーダーシップを発揮している。特に附属小学校のいじめの件は早期の解決を期待する。
- ダイバーシティ関連では、LGBTのガイドライン発行などで進展が見られた。他方、女性教員研究者の在籍比率向上のためには、思い切った取組が必要なように思われる。教員業績評価が本格導入されたが、今後は公平性と効果の観点からの検証が必要と思われる。
- いじめ事態への不適切対応や入試に関わるミスがあった。ガバナンスの強化に努めていただきたい。一方、基金の獲得額が目標を上回るなど財務基盤の強化に努めた。女性教員の比率を伸ばすなど本学のダイバーシティに果敢に取り組んでいただきたい。
- 附属小における「いじめ問題」への対応は後手に回り、危機時のマネジメントに課題がある。女性の活躍を含め、働き方改革の更なる推進に期待したい。
- ガバナンスにおいて改善が必要な点があると思われる。附属小学校の件はその一端であり、全体的なガバナンスの見直しとともに今後の改善に生かされるとよいと思う。
- 附属学校園に対する学長ガバナンスがこれまで欠如していたことが明白となったが、今後の改善のためにはよい機会と捉えたい。
- 入学手続のミスや附属学校園でのいじめ対応の管理不足が存在した。
- 少子化の進行と運営費交付金削減の下、地方国立大学の運営は厳しさを増している。だからこそ地方大学としての本学の立ち位置を再確認し、地域の未来を豊かなものとするために、大学の在り方(例えば学部構成等)を見直す時期に来ていると強く感じる。その点での議論が本学でまだ始まっていないことを残念に思う。
- 一部、属人的対応で教職員が多くの業務を行っており、ワークライフバランスの推進の観点から改善していただきたい。

## ○学長選考・監察会議委員名簿

(学外委員は50音順)

氏名	職名等	適用条項	備考
生田 雅彦	株式会社筑波銀行 代表取締役頭取	3条1項1号	
尾崎 春樹	学校法人目白学園 理事長	同	任期： 令和5年4月1日～ 令和6年3月31日
小野寺 俊	茨城県 副知事	同	
佐々木 幸一	佐々木興業株式会社 代表取締役	同	
種田 誠	学校法人茨城 理事長 種田・鈴木法律事務所 弁護士	同	議長
沼田 安広	株式会社茨城新聞社 代表取締役社長	同	
原口 弥生	人文社会科学部長	3条1項2号	
野崎 英明	教育学部長	同	
岡田 誠	理学部長	同	
乾 正知	工学部長	同	
宮口 右二	農学部長	同	
西川 陽子	全学教育機構長	同	

※ 任期：令和4年4月1日～令和6年3月31日（学長選考・監察会議規則第4条）